

# Mon Nara



Numéro281 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 MAI-JUIN 2017 5-6 月合併号

## 三野博司先生による文学講演会

### 「第135回フランス・アラカルト」開催 (5/22)

今回のフランス・アラカルトは奈良日仏協会会長の三野博司先生による「美女と野獣 騎士と精霊—文学に見る異形の愛」というテーマのお話でした。5月らしい晴天のもと、38人と多くの参加者が集い、楽しくも意義深い時間を過ごすことが出来ました。さて、先生の話はこのように始まりました。



「恋をするのは人間同士とは限らない。物語の世界では、人間と人間ならぬ異形の生き物との恋もまた生まれる」。異形の愛として取り上げたのは「美女と野獣」「騎士と精霊の恋」という二つの物語類型でした。



一つ目は「美女と野獣」の物語。美しい人間の女性と醜い獣との間に生まれる恋です。18世紀フランスのポーモン夫人の『美女と野獣』では、ヒロインのベルが父の身代わりになって野獣の館を訪れます。野獣の醜さの裏に隠れた優しさに気付いたベルは、人間の姿に戻った野獣と幸福な結婚をします。この物語は様々に変奏され、新しい作品を生み出して

してきました。コクトーもこの物語を愛読し、自ら映画化しています。コクトーの映画では、人間の内面の獣性を象徴する外見の醜さが強調され、ベルは恐怖に気絶します。しかし、ベルが野獣の優しさを知るにつれ、野獣はベルの眼差しに晒される自らの獣性に怯え、醜さに悩みます。ベルの目が鏡となり、人間の獣性を映し出すというコクトーらしい仕掛けです。ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』やユゴーの『ノートル＝ダム・ド・パリ』も、この物語類型に属します。

二つ目は、人間の男性と美しい女性に化身した自然の霊との間に育まれる恋、「騎士と精霊の恋」です。ドイツ・ロマン派フーケーの『ウンディーネ』やジャン・ジロドゥの『オンディーヌ』に代表されます。両ヒロインとも水の精ですが、人間の騎士に一途な恋を抱きます。しかし、水の精を縛る禁忌を騎士が破ってしまい、騎士は命を奪われ、人と人ならぬものとの恋は成就しません。この物語類型には、アンデルセンの『人魚姫』やドビュッシーがオペラにしたメーテルランクの『ペレアスとメリザンド』などが含まれます。



日本の「鶴の恩返し」や木下順二の『夕鶴』などの動物花嫁物語も、これに近い構造を持っています。



今回紹介された人と人ならぬものとの恋の物語で、人ならぬものが男性の場合、魔法によって怪物や野獣などに変えられた男性は、女性の愛によって人間に戻り、幸せな結婚へといたることが多い。これは、男性を見る女性の目の変化を表しているのではないかとのこと。また、人ならぬものが女性の場合、動物や自然の精が美しい乙女に化身して現れるが、恋は不幸な結果に終わることが多く、女性は自然界に帰っていく。これは、人間が自然界に抱く畏敬や憧れの反映ではないかとのことでした。

講演終了後には、日本の鶴女房、蛇女房などの民話との関連、神話世界との関連についての質問、ジェンダー的視点、人間と自然との関係という視点からの質問など、活発な質疑が交わされました。今回の講演は、参加者個々の持つ関心を刺激し、多様な主題を結び付けて考えを深める鍵、豊かな物語世界を開く鍵を与えてくれたように思います。(寒河江康夫)

### 講師からのメッセージ

三野 博司

20世紀フランス文学が私のフィールドですが、大学の仏文講読の授業ではコクトー『美女と野獣』やジロドゥー『オンディーヌ』などをとりあげました。数年前、文学作品における「恋」をテーマにした本への寄稿を求められたとき、これらの作品に共通する主題に気づきました。人間と人間ならざる生き物とのあいだの恋です。そこから「美女と野獣 騎士と精霊」の主題のもとに、他の作品を結びつける作業が始まりました。アラカルトでは大勢の方からさまざまな意見・質問をいただき、この主題の広がりあらためて実感しました。ところで、最近書き上げた論文は「カミュにおける殺人と潔白」です。日本語版は発表済み、フランス語版は来年パリで研究誌に発表予定です。こちらは「異形の恋」とは別世界です。ただ、いつも重いテーマばかりを考えてはいられないので、ファンタジーの世界に遊びたくくなります。近いうちに映画『美女と野獣』を見に行くつもりです。

## フランス文学の庭から <51> 名句の花束

三野博司 (会長)

Ses charmes surpassaient tout ce qu'on peut décrire. (2)  
彼女の魅力は描きうるすべてを越えていた。  
(アベ・プレヴォー『マノン・レスコー』 1731年)



前回取り上げたサン＝シュルピス教会での再会場面のあと、デ・グリユーはますますマノンの抗しがたい魅力に惹かれて、あとは一気に転落。たびたび裏切られながらも恋人から離れることができず、父や友人、将来の地位を捨て、賭博や殺人にまで手を汚します。最後は、娼婦としてアメリカ、ルイジアナ、ニューオーリンズの流刑地に送られたマノンにつき従って、デ・グリユーも新大陸に渡ります。(ルイジアナは、1682年フランス人入植者がルイ14世にちなんで命名し、当時フランス領でした。)

『マノン・レスコー』が書かれたのはアンシャン・レジームの時代であり、これは家父長制と宗教的権力の強い時代に、個人の情熱が押しつぶされる物語です。しかし、新大陸も結局は旧制度のコピーでした。そこでも二人は逃亡を余儀なくされ、マノンだけが荒野で死んでしまいます。この旧制度に対する、愛や個人の価値、情熱擁護の物語は、出版当時は発禁処分を受けるほど非難的でした。しかし、19世紀に入り、ロマン主義の時代になって評価され、さらには写実主義、自然主義文学もこれを味方に引き入れようとなりました。

刊行から150年を経た1885年、ギ・ド・モーパッサンは、『マノン・レスコー』の再版に序文を寄せて、次のように書きました。「かつてこれほどに鮮明に、完全に描かれた女性はいない。かつてこれほど女性的であり、かくも甘美であると同時に不実な、恐るべき女性性の精髓を体現した女性はいなかった！ *Aucune femme n'a jamais été évoquée comme celle-là, aussi nettement, aussi complètement ; aucune femme n'a jamais été plus femme, n'a jamais contenu une telle quintessence de ce redoutable féminin, si doux et si perfide !*」

この熱烈な賛美が書かれた一年前、1884年、マスネが『マノン』というタイトルでオペラ化しています。アミアンでの出会いに始まり、パリの生活、サン＝シュルピス教会での再会と、順を追って描かれます。ただ、このオペラでは、マノンがアメリカへ送られる前に死んでしまうので、ルイジアナの場面はありません。全体としては悲劇と言うより、ヒロインのコケティッシュな性格を前面に押し出しています。DVDでは、フレミング(2001年)やネトレプコ(2007年)が若い時代に演じたマノンが、その魅力を十全に開花させています。

マスネの9年後、1893年、今度は若きプッチーニが『マノン・レスコー』を作曲し、彼の出世作となりました。ここでも第1幕はアミアンでの二人の出会いです。馬車に乗ったマノンが田舎の旅籠屋にやってきます。オペラ演出において時代を現代に置き換えるのは今日ではもう常套手段ですが、10数年前にパリで見たカーセン演出では、高級乗用車と高層ビルのホテルがあらわれて、意表を突かれました。プッチーニのオペラでは、幕ごとに話が飛んでしまうので、脈絡がつかみにくいです。当時よく知られた物語だったので、それでも支障がなかったの



でしょう。最終幕はルイジアナ、マノンは死を前にして「ひとり寂しく捨てられて」と歌い、悲劇の頂点で幕が下ります。

マノン・レスコーと言えば、ファム・ファタル *femme fatale* の原型とも言われています。宿命の女、魔性の女、妖婦、毒婦などと訳されますが、その魅力によって男を破滅させる女です。ただ、この定説に対して、マノンはむしろ犠牲者で、デ・グリユーこそがストーカーだという異説が提出されています。たいへんユニークで、しかもそうかもしれないと思わせる筆力を備えています(青柳いづみこ『無邪気と悪女は紙一重』)。

〈特別寄稿〉

自由、平等、友愛

ピエール・シルヴェストリ

これらのスローガン（記事タイトル）はフランス共和国のものだが、手ひどく扱われている。自由と平等は、しばしば左派と右派の政党によって対立する考え方にされ、友愛は、もはや「他者」を受け入れられない人々によって、批判されている。過激な考え方が、国家主義・反ユダヤ主義・外国人嫌い・人種的差別によって養われ、勢いを増している。フランス人は、劣化した政治に嫌気がさし、政治を遠ざけている。そこに強いアンチ・ヨーロッパの感情を加えなければならない危険な状況の中で、この国は懐疑を抱き、未来を案じながら見つめている。



2017年5月7日、国民は共和国の新しい大統領を選んだ。

エマニュエル・マクロンは39歳でフランス史上もっとも若い大統領になり、サンマリノ共和国の例を除いて、民主主義の原理にのっとって選ばれた国家元首の早成の記録を打ち立てた。彼は、国民の一部に再び希望を取り戻させる人物だ。マクロンがとりわけ願うのは、政治活動に道徳的秩序を与えること、労働市場に再び活力を与えること、学校教育制度を改革すること、ヨーロッパの構想をさらに先へと進めること。彼の責任ははかりしれない。任期の5年間の失敗は、国民戦線 (Front National) の不寛容の権力に扉を開くことになることを、彼は承知している。

Liberté, égalité, fraternité

Pierre SILVESTRI

Cette devise, celle de la République française, est malmenée. La liberté et l'égalité sont deux notions souvent mises en opposition par les partis politiques de gauche et de droite, tandis que la fraternité est critiquée par ceux qui ne supportent plus « l'autre ». L'extrémisme gagne du terrain, nourri de nationalisme, d'antisémitisme, de xénophobie et de racisme. Les Français boudent la politique, pire, ils la rejettent. Dans ce contexte explosif auquel il faut ajouter un sentiment anti-européen massif, le pays doute et regarde l'avenir avec crainte.

Le 7 mai 2017, le peuple a choisi son nouveau Président de la République. Emmanuel Macron devient à 39 ans le plus jeune Président de l'histoire française et établit un record de précocité pour ce qui est des chefs d'états démocratiquement élus, exception faite de Saint-Marin. C'est un homme qui redonne espoir à une partie de la population. Macron souhaite notamment moraliser la vie politique, redynamiser le marché de l'emploi, améliorer le système d'éducation scolaire et aller plus loin dans la construction européenne. Sa responsabilité est immense tant il a conscience que l'échec de son quinquennat ouvrirait grandes ouvertes les portes du pouvoir à l'intolérance du Front National.

フランス語で読む日本古典：『枕草子』（Notes de Chevet）《ほととぎす》について

第39段「鳥は」では、鸚鵡、郭公、水鶏、鴨、都鳥、ひわ、ひたき等々さまざまな鳥のことが記されています。ほととぎすについては、素晴らしい鳴き声なのに卵の花（ウツギ）や花橘に止まって姿を隠しているところに奥ゆかしさを感じたり、鳴き声を人より早くきこうとして、5月の夜いったん目を覚ましてから寝ないでずっと待っていたという挿話が紹介されています。《ほととぎすは、なおさらにいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞えたるに、卵の花、花橘などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり。五月雨のみじかき夜に寝覚をして、いかで人よりさきにきかむとまたれて、夜ふかくうちいでたるこゑの、らうらうじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし。六月になりぬれば、音もせずなりぬる、すべていふもおろかなり。よる鳴くもの、なにもなにもめでたし。》

« Je ne saurais dire non plus le charme du coucou quand vient la saison. À un moment ou à l'autre, on entend sa voix triomphante. On le voit, dans les poésies, qui s'abrite parmi les fleurs de la deutzie, dans les orangers ; s'il s'y cache à demi, c'est qu'il est d'humeur boudeuse.

On s'éveille, pendant les courtes nuits du cinquième mois, au moment des pluies, et l'on attend, dans l'espoir d'entendre le coucou avant tout le monde. Tout à coup, dans la nuit sombre, son chant résonne, superbe et plein de charme. Sans qu'on puisse s'en défendre, on a le cœur tout ensorcelé ; mais quand le sixième mois est arrivé, le coucou reste muet. Vraiment, il est superflu de dire combien j'aime le coucou ! En général, tout ce qui chante la nuit est charmant. »

(traduit par André Beaujard)



## 大神神社の「スギ」と「ササユリ」

大神神社が「酒造りの神様」、とりわけ「酒造業者を守護する神さま」で、毎年11月中旬に全国から蔵元・杜氏が集まり「醸造祈願祭」が行われていることを、前号で紹介しました。今号では、この祭典の重要なシンボルである「杉玉」について、そして新しい項目として、奈良市の率川神社（大神神社摂社）の「ゆりまつり」について紹介します。



11月の祈願祭の前日  
掛け替えられたばかり  
の大杉玉



5月末頃の大杉玉

### 1) 大神神社の「杉玉」 Les boules de cèdre du sanctuaire Ômiwa-jinja

大神神社の拝殿入口の天井に、直径約1.5m、重さ約250kgもある大きな杉玉がつるされています。毎年、醸造祈願祭の前日に、1年前の杉玉が新しいものに掛け替えられます。酒造関係者からなる団体のメンバー（約250軒）にはこの機会に直径約30cmほどの杉玉が授与されます。小さな杉玉を作るのにひとりで約5時間かかり、大杉玉を作るには5、6人で丸2日かかります。杉玉を作るために、三輪山に生えている杉の枝が使われているのは、大神神社のご神木が杉であるためです。これらの杉玉の起源は不明です。江戸時代の初め頃には、杉の葉を束ねたものが酒屋の店頭で吊るされていたこと、江戸時代の後半に、現在のような球形のものがみられるようです。

Au plafond, à l'entrée du pavillon principal du sanctuaire Ômiwa-jinja, le « Pavillon des prières » (*haiden*), est accrochée une énorme boule de cèdre (*sugitama*) mesurant un mètre cinquante de diamètre et pesant environ 250 kilos. Chaque année, la veille de la fête de « Jôzô-kigan-sai », la boule de l'année précédente est remplacée par une nouvelle. Les membres de l'association des producteurs et marchands de saké (250 environ) s'y réunissent pour l'occasion et reçoivent chacun une boule de cèdre d'une trentaine de centimètres de diamètre. Si une de ces petites boules de cèdre peut être fabriquée en 5 heures par une seule personne, la grosse boule à l'entrée du pavillon nécessite quant à elle le travail de 5 à 6 personnes pendant deux jours ! Pour la confectionner, on utilise de petites branches issues de cèdres qui poussent dans la montagne sacrée Ômiwa-san car le cèdre est l'arbre sacré de ce sanctuaire. L'origine de ces boules de cèdre n'est pas bien connue. On sait seulement que dans la première moitié de l'époque d'Édo, on exposait parfois des bouquets de branches de cèdres devant les boutiques de saké et que c'est dans la deuxième moitié de la même époque que la forme de boule telle qu'on la connaît aujourd'hui est apparue.

### 2) 率川（いさがわ）神社の「ゆりまつり」 La Fête des fleurs de lys du sanctuaire Isagawa-jinja



率川神社は大神神社の摂社で奈良市最古の神社です。飛鳥時代、推古天皇元年（593）に祀られました。祭神の媛踏躰五十鈴姫命（ひめたたらいすずひめのみこと）は神武天皇の皇后で、父神の狭井大神は大神神社の大物主大神と同じ神様です。毎年6月17日に「ゆりまつり」（「三枝祭」）が行われています。昔、祭神が住んでいた三輪山の麓の狭井川のほとりには笹ゆりの花が美しく咲き誇っていたそうです。その縁故から後世、姫神に慶んでもらうため、酒罎に笹ゆりの花を飾っておまつりするようになった、と言い伝えられています。大宝元年（701）制定の『大宝令』には、「三枝祭」は国家の祭祀として定められ、疫病を鎮めることを祈るお祭りです。現在、このお祭りに奉獻される笹百合の花は、大神神社境内で育てられています。例祭前日の16日に「ささゆり奉獻神事」が行われ、桜井の大神神社から奈良市の率川神社に届けられています。

Le sanctuaire Isagawa-jinja, le plus ancien de Nara, dépend du sanctuaire Ômiwa-jinja et est vénéré depuis la première année du règne de l'impératrice Suiko (593), à l'époque d'Asuka. La divinité principale de ce sanctuaire, la princesse Himetataraisuzu, était l'épouse de l'empereur Jinmu et son père, Sai-no-Ôkami, est assimilé à Ômononushi-no-Ôkami. Le 17 juin de chaque année se tient au sanctuaire Isagawa-jinja « la Fête des fleurs de lys » (le *Saikusa-no-matsuri*). Jadis, cette princesse habitait au bord de la rivière Sai-gawa, au pied du mont Miwa, où l'on dit que les lys fleurissaient joliment. Il paraît que c'est pour cette raison que, par la suite, pour faire plaisir à la princesse, on organisa cette fête lors de laquelle on fait offrande de bouquets de fleurs de lys présentés dans des tonneaux à saké. Avec le « Code de Taihō » promulgué la première année de l'ère Taihō (701), cette fête visant à éloigner les épidémies fut désignée comme « Fête officielle de l'État ». De nos jours, les fleurs utilisées durant la fête sont cultivées au sanctuaire Ômiwa. La veille se tient le « rituel d'offrande des fleurs de lys » qui sont apportées du sanctuaire Ômiwa de la ville de Sakurai au sanctuaire Isagawa de Nara.

※日本語の案内と写真は三輪明神大神神社提供資料と HP、率川神社 HP を参照・一部転載。仏訳は Pierre Régnier さんによる。

ガイドクラブ 2017 年度の日程：9月16日（土）午後に勉強会（学園前西部公民館）、10月14日（土）に大神神社の散策と、今西酒造での清酒「三諸杉」の「利き酒体験」を予定しています。

## フランス各地方の伝統菓子 (2) ロレーヌの『ババ・オ・ラム』 (Baba au rhum)

地方菓子にはグルメな王様や王妃の結婚によって生まれたお菓子が時々見られます。ババ・オ・ラムは、フランス北東部ロレーヌ地方のグルメな公爵、スタニスラス・レクチンスキー公により誕生したと言われていました。

これはブリオッシュ生地を、背の高いプリン型で焼き、熱いうちに砂糖シロップにどっぷりつけて皿に取り、ラム酒の原液をかけて食べる大人のお菓子。ラム酒が、ピリッと効いて美味しいですよ。

ある日、レクチンスキー公が旅から持ち帰ったブリオッシュが固くなっていたため、香りづけしたワインに浸して食べてみると、とても美味しかったというのが発祥と言われています。19世紀になるとラム酒が入手しやすくなったため、現在ではラム酒を使うのが一般的です。ババ (baba) の名前は彼の愛読書の『千夜一夜物語』のアリババの名前をとって名付けたと言われていました。かつてスタニスラス公に仕えたストーレー (Stohrer) が開いたモントルグリュ通りにあるパリ最古のパティスリーには、現在もレトロなドレンチェリーとアンゼリカの砂糖漬けのをせた「ババ・オ・ラム」が売られています。



(柳谷安以子)

## フランス産チーズの紹介 (6) 「ロックフォール」 (Roquefort)

世界三大ブルーチーズとして名高いロックフォールはフランスが誇る羊乳製の青カビチーズ。しっかりとした大き目の青かびが入っていて、塩気も充分、濃厚なうまみと刺激味が多くの人を魅了してきました。まさに王者の風格があります。このチーズ、指定された熟成場所があり、それはなんと、『洞窟』の中！神秘的ですよ。

昔々、羊飼いの少年が美女を追って、パンとチーズを洞窟に置き去りにしてしまい、しばらくして帰ってくるとパンとチーズには青カビが。有名なロックフォール誕生の秘話なのですが、今もこの秘話のように造られています。場所はルエルグ地方、ロックフォール・シュール・スールズン村にある石灰岩の山の断崖が崩れ落ちてできた自然の洞窟がこのチーズの熟成庫です。洞窟には亀裂があり、そこを吹き抜けるフルリーヌという風がチーズの熟成にぴったりな温度と湿度をもたらしてくれます。また、そこにはこのチーズに素晴らしい風味を与えてくれる土着の青カビが生息していて、パンを使って青カビを採集し、このチーズは造られます。

ロックフォールの芳醇な味わいとピリッとした刺激は、はちみつやソーテルヌなどの甘ロゼザートワインと最高の相性です。塩気が苦手ならば、チーズと同量の無塩バターと一緒に食べてみてください。まるやかにになり、リッチな味わいになりますよ。立派な青カビに圧倒されるかもしれませんが、何度か食べているうちに必ず虜となるでしょう。

(法人会員 ビストロ ルノール 北田由佳)



## 簡単レシピの紹介：「自家製マヨネーズ」 (mayonnaise maison)

エビ・イカ・アスパラ等の新鮮な海産物や野菜をさっと茹でてお皿に盛り、市販のではなく、自家製のマヨネーズを添えるだけで、ちょっとしたオードブルになります。電動の泡立て器を用いると、簡単できめ細かに仕上がります。(編集部)

【材料】卵黄 1 個分、酢・塩・胡椒少々、好みの植物油 50-70 cc、レモン汁、好みのハーブのみじん切り

【Ingrédients】 1 jaune d'œuf, un peu de vinaigre, sel et poivre, 50-70 cl d'huile végétale (au choix), du jus de citron, des herbes (au choix) coupées finement.

1) ボールに卵黄・塩・胡椒・酢を入れて混ぜ合わせる。

Dans un bol, mélangez le jaune d'œuf, le sel, le poivre et le vinaigre.

2) 泡立て器で泡立てながら少しずつ油を足してねっとりさせていく。

Fouettez en versant peu à peu l'huile de façon à faire épaissir la mayonnaise.

3) 好みで香りづけにレモン汁やハーブを加えてもよい。

On peut y ajouter pour la parfumer, selon le goût, un peu de jus de citron ou des herbes.



花咲くフランス：リンゴとサンザシ

浅井 直子

4月下旬から5月中旬にかけて、フランスのノルマンディー、ボース、ブルターニュの各地方を旅しました。この時期、気候がとても爽やかです。春が到来し、木々は芽吹き、新緑の若葉は陽光を浴びて透き通るようなエメラルド・グリーンに輝いています。公園・野原・森の小道を歩いていると、木の葉を揺らすそよ風が肌にふれ、頭上の高いところでは鳥たちの鳴き声が軽やかに響きわたり、広大な大地に身体がとけこんでいくような心地よさがあります。そしてこの旅の間に、リンゴとサンザシの花をいたるところで目にし、心ゆくまで愛でることができたのは、とても幸せなことでした。

リンゴとサンザシは、プルーストの作品において、重要な意味を担う花として描かれています。手のこんだ比喻を積み重ね、伝説や神話を喚起させ、人物を花とともに登場させ、無意識的記憶現象に関わらせて語り、物語全体に厚みと深みがもたらされています。そんな断章を読むと、夢想やイメージが豊かに広がります。文章が織りなす世界は、そこに描かれている現実の対象とは、ある意味で別物かもしれません。小説で描写されている花々を、読者が現実世界で眼の前にしたとしたら、語り手と似たように感じるにせよ、違和感を覚えるにせよ、ひとつの「出来事」として、新しい知覚・認識の経験ともなることでしょう。

旅の初日、かつてプルーストがアゴスチネリ（後に小説の女主人公の主要モデルとなる青年）の運転する車で、ラスキンの著書を手がかりに、葉模様の石の彫刻を見に訪れた大聖堂のあるリジューの町を訪れ、翌日リジューからカンブルメールに向かいました。カンブルメールは『失われた時を求めて』の中では地方貴族名として登場しますが、ノルマンディーに実在する土地の名でもあります。村にはシードルの醸造所があり、ゆるやかな起伏のある丘にリンゴ畑が広がっています。まだ固い芽だけの木、蕾を膨らませ花が咲きはじめている木、満開に近い木、様々ありました。牛たちが花咲くリンゴの木の下で草を食んでいるのも、のどかなカンブルメールらしい風景です。



イリエ・コンプレの白色とバラ色のサンザシ、麦畑とその向こうに菜の花畑

リンゴは蕾の時は濃いピンク色ですが、開花すると花びらは白色になります。一本の木に小さな花をいくつもつけるので、遠くからはピンクと白がまざりあって、全体でどこことなくぼんやりした薄桃色にみえます。ところが近づいてみると、まったく違う表情をみせてくれました。蕾も花びらもくっきりとした輪郭と個性をそなえ、きゅっとひきしまったピンクの蕾には何ともいえない可憐さがあり、ピンクから白に変化していく花びらには、優しいお姉さんのような大らかな雰囲気だけがただよっています。蕾や花を囲んでいる緑色の葉は、いつもそばにいてくれる兄弟のような安心感があります。木から少し離れると、何本もの枝が空に広がっていくゆるやかな曲線模様が、小さな宇宙さえ感じさせてくれます。

穀倉地帯の平原ボース地方とペルシュ地方の境界にあるイリエ=コンプレには、5月初めに訪れました。プルーストの小説の舞台「コンプレ」のモデルとされている町で、プルースト記念館があります。5月にサンザシの花を見に来たのは2度目です。2011年、初めて満開のサンザシの小道を歩いた時には、プルースト読者として長年の夢がかない、とても幸福な気持ちに満たされました。ただその時は、プルースト友の会の行事だったこともあり、小道全体の雰囲気は十分に味わったものの、個々の花をじっくり眺める余裕がありませんでした。その後、サンザシの断章を読みかえしてみると、花びらや雄蕊について細密な描写がなされており、それらをちゃんと見ていなかったことに気づきました。

そんなこともあり、今回はゆっくりと時間をかけて、一枝に無数に花をつけるサンザシの小さな花を間近で見ることができました。花びらはリンゴのよりもさらに白い純白で、中心部には鮮やかな桃色の雄蕊が20本くらい角のように生え、立ち姿がユーモラスにも感じられます。純白と桃色の組み合わせの美しさ、茶目気のある可愛らしさに、すっかり魅了されてしまいました。葉の形にも特徴があり、その後サンザシとよく似た白い花をみても、葉の形で識別できるようになりました。バラ色のサンザシは白色のよりも少し咲く時期が遅れていましたが、独特の存在感がありました。



ノルマンディー地方カンブルメールのリンゴ

## 会員紹介

## 国際（英語）講師の仕事

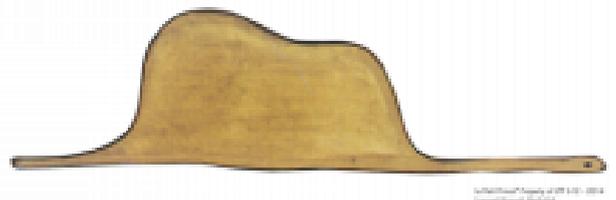
菌田 章恵（そのだ あきえ）

昨年4月から奈良女子大学附属小学校で5、6年生の国際（英語）講師を始めて1年が経ちました。児童英語講師の仕事は20年以上の経験があったので、できるだろうと軽い気持ちでお引き受けしました。

ところが、この1年を振り返ると、頭の中は常に教材探しのモードになっていました。一応文部科学省が作成した薄いテキストはあるのですが、週に2時間の授業をカバーすることはできません。また内容も、附属が大切にしている「生徒が興味をもって主体的に学ぶ」テーマになっているとは限りません。20年以上の経験があるといっても、私がしていたのはテキストとワークブック、補助教材の音源、ビデオ、カードを使って、レッスン内容が記載されたマニュアルを見て教えていたので、手法が全く違います。附属では教え込むことはしないで、英語嫌いになって中学に進学させないようにとされています。

昨年は、生徒の生活に直結したことであれば興味が湧くだろうと考えて学校の年間行事を参考にしました。運動会の前にはスポーツ、音楽会の前には楽器、合宿の前には自然、公開授業の前には科目というようにテーマを決め教材も選んでいました。

さて今年はどうしようかと思いながら、テキストのレッスン1にある「世界の挨拶」を紹介し、生徒にどの国の挨拶が気に入ったかと尋ねました。「フランス語の挨拶がかっこいい！」という意見があり人気ナンバーワンで、興味を持ってくれたのかなと感じました。それで“*What's this?*” “*It's a ~.*” のテーマの時に、『星の王子様』*Le Petit Prince* の最初にでてくる象をお腹に呑み込んだ大蛇ボアの箇所を使おうと決めました。授業は国際（英語）ですので、少しならほかの外国語を使う自由はあります。昨年は“*What's this?*” で教材に影絵を用いて、生徒に何か類推させました。丸い影絵を見せた時には、*ball, dish, watermelon, balloon, hat* などという答えが返ってきました。今年はこの絵を見せたら、どんな答えが返ってくるでしょうか？



## フランス語と私

辻 みち代

« *Trois croissants, s'il vous plaît!* (クロワッサン3つお願いします) » と言ったつもりの私に返ってきたのは、店員さんの « *Je ne comprends pas!* (わかりません) » という無情な言葉。11年間のハンブルク生活の最後の年にはちょうどフランス語の授業を受け始めていたし、ドイツの友人には「大丈夫、アルザスではドイツ語が通じるから」と言われ、安心してきっていた私がフランスのコルマル (Colmar) の町に引っ越してきた次の日、近所のパン屋で経験した出来事でした。1989年、ベルリンの壁が崩壊する直前、私たち家族は慣れ親しんだハンブルクを去り、最後まで使っていた食器と2羽のインコを車に積んで、主人の次の赴任地へ向かいました。南へ向けて800キロの旅でした。

当時のアルザスでドイツ語を話す人は、学校でドイツ語で授業を受けた80歳以上の年代の方を除いてはほんの少数でした。慌ててフランス語のクラスに通い始めた私が友達になったのは、フランス人のご主人と結婚して隣町に住んでいたドイツ人女性の *Irmgard* でした。彼女との会話はドイツ語でしたが、3年間のフランス滞在中ずっとお付き合いが続き、帰国時には子供用の家具など引き取ってもらいました。

次の年、一念発起してストラスブール (*Strasbourg*) 大学の外国人のためのフランス語講座 (*Cours de francais pour étranger*) に学生として通うことにしました。クラスの大部分はアメリカからの若い学生たち



コルマルの運河沿いの魚料理のレストラン *Aux Trois Poissons* での送別会 (右端が私)

で、みるみるうちに上達していく彼らを横目で見ながら、仏文法と悪戦苦闘の毎日でした。コルマルから1時間の列車の旅を1年半続けたのですが、座って帰りたいために乗った *fumer* (喫煙) の車両で嗅いだ強烈な *tabac* (たばこ) の匂いを今でも思い出すことがあります。1年の終わりに自由発表があり、日本語の成り立ちや特徴についてクラスで発表した時、熱心に聞いてもらったのが印象に残っています。帰国後25年、*Jamet* 先生のクラスに1年ほど通ったほかはフランス語とは遠ざかってしまいました。近いうちにぜひ、木組みの可愛らしい家が運河沿いに立ち並ぶ街 *Colmar* をそぞろ歩き、当時足繁く通っていた魚料理のレストランに行ってみたいと思います。その時、何とかフランス語で注文するためにも、再チャレンジしなければ、と考えるこの頃です。

## 第136回 フランス・アラカルト「ジョルジュ・ブラッサンスのシャンソンの紹介」

- ❖ 日時：2017年7月3日(月) 14:30~16:30
- ❖ 会場：生駒市セイセイビル 2階 205 会議室 (近鉄生駒駅南へ徒歩2分)
- ❖ 会費：会員 1000円 一般 1500円 (お茶とお菓子付き) ❖ 定員：20名 (要予約)
- ❖ 問い合わせと申込先：Nasai206@gmail.com tel : 090-8538-2300 (浅井)
- ❖ ゲスト：セドリック・ベレク(Cédric Belec) さん：(略歴) 音楽の勉強と音楽の中等教員免許取得後、中学と高校で音楽教師。10年後外国語としてのフランス語教育修士号取得。この資格が教員経験と結びつき、5年前から日本のアンスティチュ・フランセで教え始める。岡山大学、関西学院大学にてフランス語講師。



❖ ゲストからのメッセージ：Lors de cet exposé, je présenterai brièvement la vie de G. Brassens pour me concentrer davantage sur ses idées politiques et ses valeurs. Il sera également question de son rapport à la langue française et de son amour du mot juste. Enfin l'analyse de quelques-uns de ses textes de chansons permettra de mieux appréhender la pensée de cette icône de la chanson française. この発表ではブラッサンスの人生を簡略に紹介し、彼の政治の見方や考え方に焦点をあててみます。さらには、彼のフランス語との関わり方と彼の適切な言葉への愛着についても問うてみます。さいごに、彼のシャンソンの歌詞を検討し、このフランスシャンソン界を代表する人物の考え方について、理解をよりいっそう深めることができればと思います。

## 第44回 奈良日仏協会シネクラブ例会：6/25は会場の都合で7/23に変更になりました。



- 6月25日(日)に予定されていたシネクラブ例会は7月23日(日)に延期になりました。ご注意ください。
- ★7月23日(日) 13:30~17:00 ★奈良市西部公民館 5階第4講座室 (予定)
  - ★プログラム：サッシャ・ギトリ監督『夢を見ましょう』(Faisons un rêve, 1936年, 80分)
  - ★参加費：会員無料、一般 300円 ★飲み会：例会終了後「味楽座」にて
  - ★問い合わせ：Nasai206@gmail.com (予約不要) ★1916年に初演された監督自身の戯曲作品『夢を見ましょう』を、20年後に自らの手で映画化。演劇と映画の共通点と違いに注目してみたいと思います。

### 《2017年度第2回理事会報告》

…事務局

日時：2017年5月18日(木) 15:00~16:20  
 場所：放送大学奈良学習センターZ308号室  
 出席者：三野、野島、浅井、井田、中辻、高松、杉谷  
 議題1. 2017年度暫定会員92名。  
 議題2. 前回理事会(3/16)後の活動：(3/21) 在京都フランス総領事主催「グー・ド・フランス2017」会長参加。  
 議題3. 今後の行事：(5/22) 第135回フランス・アラカルト「美女と野獣 騎士と精霊」、(6/25) 第44回日仏シネクラブ例会『夢を見ましょう』⇒7/23(日)に変更、(7/3) 第136回フランスアラカルト「ジョルジュ・ブラッサンスのシャンソン」、(9/16) ガイドクラブ勉強会、(9/23) 秋の教養講座 講師は山本邦彦さん(奈良女子大学名誉教授) 演題「モリエールとその時代(仮)」、(10/14) ガイドクラブ散策 大神神社と今西酒造(桜井市)。議題4. Mon Nara 講座表掲載基準明確にし体裁統一。議題5. その他：HP 欠損分データの復元。次回理事会：7月20日(木) 15:00~16:30 (場所 理事会後、café WAKAKUSA に変更。)

### 会員通信

- ★ムジークフェストなら2017が始まりました。奈良日仏協会会員の方も出演されています。すでに申込締切された演奏会もありますが、この機会に様々なジャンルの音楽をお楽しみください。
- ★6月19日(月) 15:00~三木康子(ピアノ出演) ムジークフェストなら、奈良女子大学記念館にて 連絡先 0742-61-1103(三木)
- ★6月30日(金) 19時~「フランス語で歌うシャンソン」日本テレマン協会主催、連絡先 090-9614-6477(中辻)



### 編集後記

☆6月は「バラ」(rose)の花をあちこちで見かけます。一口にバラといっても、数多くの品種・名前があり、とうてい全部は覚えきれませんが、「ピエール・ド・ロンサル」(Pierre de Ronssard)は、初心者も育てやすく日本でも人気の高いツルバラです。☆外側の花びらは白に近い薄桃色、内側にいくにつれてピンクが濃くなり、鮮やかなバラ色のグラデーションが魅力的です。☆フランス文学の愛好者なら、ルネッサンス時代の偉大な詩人の名前を思い浮かべるかもしれません。☆ロンサルには花を詠んだ詩句がいくつもありますが、特にバラの花のものはよく知られています。「恋人よ、みにゆこう、/ けさ、あけぼのの陽をうけて / 紅の衣をといた、ばらの花 / 今宵いま、赤い衣のその襲も / あなたににた色つやも / 色おとろえていないかと。」Mignonne, allons voir si la rose / Qui ce matin avoit desclose / Sa robe de pourpre au Soleil, / A point perdu ceste vesprée / Les plis de sa robe pourprée, / Et son teint au vostre pareil. (「カッサンドルへのオード」より) ☆詩句そのものが音楽のようであり、音楽家たちもまたこの詩に曲をつけています。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に**新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報**などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は**7月20日**が原稿締切日です。

Mon Nara mai-juin 2017 **5-6月**合併号 numéro281

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : [nara.afj@gmail.com](mailto:nara.afj@gmail.com) FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司